

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 畑中 めぐみ

論 文 題 目

闘病仲間の死を経験した小児がん患児の母親の経験

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 池松 裕子

名古屋大学准教授 新家 一輝

名古屋大学教授 浅野 みどり

論文審査の結果の要旨

小児がんの治療成績は向上したものの、依然として約 2 割は死に至る。日本では、2014 年に国内に 15 の小児がん拠点病院が指定され、再発や難治の患児が集約されている。小児がん拠点病院では、難治例が集まることから必然的に死亡例も多くなり、入院中に闘病仲間の死を経験する患児と家族は少なくない。日本では、海外と比べ小児がんの入院治療は半年以上と長期にわたる点が特徴的で、入院中に患児同士、親同士は関係を深めるが、闘病仲間の死を経験した患児と家族への適切なグリーフサポートはほとんど実践されていない。さらに、病名告知と同様に、患児が闘病仲間の死を察知していても、患児に闘病仲間の死を伝えるなどの際には、親の許可が必要とされるが、親は自分の子どもに伝えることについて消極的な場合が多い。これは、親自身が悲嘆や恐怖、不安を抱えているためであることが推測される。しかしながら、闘病仲間の死を経験した患児の親が、子どもの闘病仲間の死をどのような体験として捉え、どのようなサポートを必要としているかについて検討された報告はない。

本研究の目的は、闘病中に闘病仲間の死を経験した小児がん患児の親の体験を明らかにし、親への必要な支援を検討することである。小児がん拠点病院等の 4 施設において闘病仲間の死を経験した小児がん患児の母親 17 名に半構成的面接を実施した。Grounded Theory Approach により逐語録データに基づきカテゴリーを抽出し、現象のプロパティとディメンションを確認してカテゴリー関連図を描き、その経験（13 サブカテゴリーで構成された 4 カテゴリー）を明らかにした。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

- ・闘病仲間の死を経験した小児がん患児の母親は、【わが子にも起こりうる死への恐怖と悲嘆】、【わが子の最善を見極める】、【悲嘆の共有】、【死を拒絶しわが子の世話に没頭する】を経験していた。
- ・子どもの闘病仲間が亡くなったと知ると、母親は自らの悲しみよりその死を受けてわが子にどう向き合うかについて考えることを優先させていた。悲嘆や再発の恐怖が強い母親は、闘病仲間の死からわが子の死を連想し、子どもも同じように自分の死を連想すると考えていた。また、【死の拒絶とわが子の世話への没頭】をする判断をした母親は、子どもに嘘をつき通し、他の闘病仲間の母親たちと母親と距離を置き、亡くなった闘病仲間と自分の子どもの違いを探しながらわが子の世話に没頭していたが、それはその母親なりに、わが子の最善を判断した結果の行動であった。
- ・母親が子どもに闘病仲間の死を伝え、悲嘆を共有すると判断するには、子どもが死を受け止められるかを見極めが影響しており、さらに、母親は、周囲からの支援や死を伝えることへの承認を必要としていた。




論文審査の結果の要旨

- ・子どもが闘病仲間の死を受け止められるかどうかを見極める母親の視点には、1) 自分の死を予感すると考える度合い、2) 過去に受けた病状説明時の反応、3) 現在の治療を前向きに受けられているか、4) 今後大きな治療を控えていないか、5) 受けている治療や自分の現状を子どもなりに理解できているか であった。
- ・母親はこれまでの子どもの様子を根拠に見極めていることが明らかとなったが、客観的な判断は難しく医療者や周囲の支援が必要である。
- ・医療者は、我が子にも起こりうる死への恐怖と悲嘆を感じる母親に寄り添い、母親とパートナーシップ関係を結ぶことで、闘病仲間の死を経験した小児がん患児のケアをスタートすることができる。

本研究の主な内容は、Journal of Nursing and Palliative Care Vol.6 に掲載された。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第	号	氏名	畑中 めぐみ
試験担当者	主査 名古屋大学教授 池松 裕子 	名古屋大学准教授 新家 一輝 	名古屋大学教授 浅野 みどり 	
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 既存の理論「悲嘆のプロセス」「ストレス・コーピング」等と本研究における知見との相違あるいは共通点について 2. 半構造面接調査においてインタビュアーが与えた影響の可能性とその対処について 3. 理論的サンプリングの状況 (ex. 宗教等の多様性) と影響について 4. 対象の背景 (ex. 初発か再発か) による母親の経験の相違や特徴について 5. データ分析のstepおよびストーリーラインの描き方、カテゴリー名について 6. Grounded Theory Approach におけるCobin & Straussの分析手法とSaiki-Craighill の分析手法との違いや特徴について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、<u>看護</u>学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				